

後世に生きる *Pride and Prejudice*  
—主人公エリザベスの変容性—

コース	国際文化コース
学籍番号	130107
氏名	浦 萌々理
指導教員	加藤 千博

イギリスの十八世紀女流作家ジェイン・オースティンの著書である *Pride and Prejudice* は、現代でも多くの人に親しまれ続けている。本作が土台となった翻案作品は数多く出版されており、世界中で長年に渡って読み継がれている。ではなぜオースティンの他作品ではなく、*Pride and Prejudice* が人気を博してきたのだろうか。本論文では、その要因として本作の主人公であるエリザベス・ベネットが、異なる時代や様々な国においていかようにも変容できる性質を持つからであるという仮説を証明していく。

*Pride and Prejudice* が長年に渡って人気を博し続けてきた理由を検証するにあたり、主人公エリザベスの変遷に注目する。まず本作が現代において、様々な形に改変されながら大衆に受け入れられるようになった経緯を説明する。その際に、オースティンが大衆により身近な存在となったきっかけとして映像化作品を取り上げ、現代の観客に向けた工夫を探る。また、*Pride and Prejudice* を文化的視点から考察し、現代にどのように作品が息づいているかを探る。次に主人公エリザベスを中心に、フェミニズム・パターンリズムの二つの対立する意見を取り上げ、作品の持つ「両面性」に着目する。またエリザベスが、翻案作品においてどのように改変されて描かれているかを、三つの作品のそれぞれの主人公の特徴を取り上げることで考察していく。以上の方法で、*Pride and Prejudice* における、主人公エリザベスの重要性を強調していく。

まず、*Pride and Prejudice* の映像化作品を取り上げ、現代の観客に向けてどのような工夫されているかに着目した。戦争を示唆する要素やハリウッド的要素を作品に組み込むことで、当時の社会状況をうまく反映したり、ヒーローの官能的要素を強調したりと、観客の好みに合わせた工夫を行っていることが明らかとなった。2005年公開の *Pride and Prejudice* には、アメリカ版とイギリス版の二つのエンディングが設けられていることにも言及し、それぞれの国民性を考慮したうえで、原作に新たにストーリーを付加するという試みがされていることがわかった。文化の面においては、近年 *Pride and Prejudice* にまつわるツアーや演劇などが作品の人気を促したと述べた。また文学界においては、作品を帝国主義やスポーツ学と結びつけることができるという、現代ならではの学問的解釈に注目した。このことから、*Pride and Prejudice* と現代の文化・文学には強い繋がりがあり、今後も長く後世にまで受け継がれていくであろうというこ

とを証明した。

次に、主人公エリザベスを通して *Pride and Prejudice* のフェミニズムとパターナリズムの両方の立場からの解釈を見たが、パターナリズム的立場に優位性があると論じた。しかし本論文では、あくまでも *Pride and Prejudice* の持つ、真逆の立場から解釈される「両面性」を強調した。エリザベスが作品を通して体現しているフェミニズムとパターナリズムの「両面性」こそ、長年に渡って議論を呼んでいる要因であり、本作の文学的な価値であるといえるのであることが明らかになった。

最後に、*Pride and Prejudice* が土台となっている翻案作品での主人公の描かれ方に着目した。翻案作品の一つであるインド映画 *Bride and Prejudice* では、エリザベスにあたる主人公ラーリタが、インドの文化や制度について肯定的な発言をすることから、鑑賞者は彼女によってインドという国についての理解を深めることができることがわかった。また日本の近大小説『真知子』にて著者の野上弥生子は、社会主義者の主人公真知子の思想の変遷を描くことで、若者の急進的思想への警告を発信していたことが読み取れた。二十一世紀の人気イギリス小説 *Bridget Jones's Diary* では、主人公ブリジットが現代の社会問題をユーモアたっぷりに揶揄する。これが彼女の一人称による日記調で語られるため、読者はその日記を追うことでいつの間にかブリジットに自分自身を重ね、共感できていることがわかった。以上の三つの翻案作品の分析から、三作品はすべて *Pride and Prejudice* を土台にしたという点においては共通するが、主人公の描かれ方が時代や国によってそれぞれ異なっていることがわかった。つまり *Pride and Prejudice* の主人公エリザベスは、様々な場面で変容されることが可能であり、読者はそのエリザベスを通してそれぞれの翻案作品のメッセージを読み取ることができるということが明らかになった。ここから、*Pride and Prejudice* が現代においても読まれる理由として、主人公エリザベスが時代や国によってうまく適応され、翻案作品でいかようにも改変されうるからであるということを証明した。

オースティンの *Pride and Prejudice* は二世紀以上もの長いタイムラグをもろともせず、文学界においても、大衆文化においても人気を博し続けている作品である。主人公エリザベスを通し、フェミニズムとパターナリズムの両方の観点から作品を論じることができ、その論争に終わりは見えない。加えて、主人公エリザベスは時代や国によっていかようにも変容できるがゆえに、翻案作品に強いメッセージを吹き込むことのできる、万能なキャラクターであることもわかった。ゆえに作品の解釈は、読者がどのようにエリザベスを読むかに委ねられており、そこに読者を飽きさせない仕掛けがある。*Pride and Prejudice* が現代まで読み継がれてきたのは、単に作品が面白いからというのではなく、主人公エリザベスが時代や国によっていかようにも変容されうる性質を持っていることが重要な要因となっているのである。本論文は、エリザベスが現代において多様に変容されうる存在であることを明らかにしたという点で、*Pride and Prejudice* の作品価値を改めて立証することに寄与した。

宮崎駿『ハウルの動く城』の価値の再考  
—『ハウルの動く城』と *Howl's Moving Castle*  
における戦争描写の比較から—

コース 国際文化コース  
学籍番号 130118  
氏名 大黒 茜  
指導教員 加藤 千博

『ハウルの動く城』は2004年に公開された宮崎駿監督によるアニメ映画である。本作は商業的にも芸術的にも国内外で成功を収めているかのように見える一方で、批評家の間では賛否両論が分かれる作品でもある。その否定的な批評の大半が原作小説との相違に起因するものである。本論文では『ハウルの動く城』は *Howl's Moving Castle* の映像化作品ではなく、宮崎によるオリジナル版であるという前提を基に、宮崎版『ハウルの動く城』に対する批判を否定する立場をとり、宮崎版『ハウルの動く城』には原作小説とは異なる価値があると検証することを主題とする。

本作の原作小説は、1986年にイギリスで出版された Diana Wynne Jones の *Howl's Moving Castle* である。原作小説では背景描写にすぎないが、本作では大々的に演出されている戦争描写が、批評家たちの中で最も議論されている点である。前述したように本作は多方面で評価されている一方で、批評家の意見が賛意両論分かれている。こうした矛盾が生じた要因を解明し、『ハウルの動く城』で戦争を色濃く描写した宮崎の意図を明らかにしたいという思いが本論文の主題設定の動機である。

第1章では宮崎駿という人物に焦点を当て、幼少期の母親とのエピソードや本人のインタビューなどから、彼の政治的思想とその変遷を論じる。また、沖縄県の普天間基地辺野古移設問題についての記者会見を記した記事をふまえ、現在の彼の政治的思想についても考察を行う。第2章では、『ハウルの動く城』を含む彼の3作品に焦点を当て、作品から読み取ることができる彼の戦争観について論じる。第3章では、『ハウルの動く城』と *Howl's Moving Castle* の相違と、どうして相違が生じたのかその理由を明確にする。そして『ハウルの動く城』には価値があるという事を明らかにする。

第1章では、第二次世界大戦下に生まれた宮崎は日本が敗戦国であるという「屈辱」を抱えていたということを示した。同時に、戦争下の日本政府が国民皆兵を

掲げ国民の生活をないがしろにしてきたという事、アジア諸国に非人道的行為を行ってきたという事に対して憤りを感じ、日本人であることを「屈辱」と感じていたという事も示した。彼がこうした二種類の「屈辱」を抱えていたことを明らかにした後、彼の政治的思想の変遷を考察した。明言は避けているが、彼の中には現在でも「左翼的」かつ「社会主義的」な理想主義が存在しているということが彼の発言やその考察から分かった。そして彼は現在の日本が世界の中心であろうとすることに否定的な姿勢をとっており、日本が小国主義でいることを推奨しているということを明らかにした。

第2章において、『紅の豚』で宮崎は、正義の判断を政府や国家権力に委ねるのではなく自分自身で行うことの重要性を訴えていると示した。また『もののけ姫』では、必ずしも悪であると断定できない悪役の存在から、宮崎は反「勧善懲悪」的描写を用いていると示した。そして『ハウルの動く城』では、ハウルの戦争に対する姿勢がぶれているという事、物語の中で生じている戦争の背景や目的が明示されない事から、現実の戦争がいかに曖昧に存在しているかという事を宮崎は浮き彫りにしているとした。

第3章では、『ハウルの動く城』と *Howl's Moving Castle* の相違は戦争描写にあり、その相違は日英の戦争観の相違に起因しているということを明らかにした。日本が第二次世界大戦において敗戦国であると位置づけられるのに対し、*Howl's Moving Castle* が生まれたイギリスは戦勝国と位置づけられる。両国の戦争観の相違は終戦記念日の様子などからも明白であり、『ハウルの動く城』で生じた *Howl's Moving Castle* との相違も必然であったと言える。そして異なるアイデンティティを持つ作品に、日本の戦争観を組み込んだ宮崎の取り組みは評価されるべきものであり、そうした取り組みの下で完成した『ハウルの動く城』は価値のあるものであると結論付けた。

『ハウルの動く城』は *Howl's Moving Castle* との相違ゆえに否定的な批評も多い作品であり、本論文はそうした批評を批判する立場をとってきた。『ハウルの動く城』の価値を明らかにしたという事、そして否定的な批評の要因であった戦争描写こそが『ハウルの動く城』の価値につながるものであると示した事が、本論文の意義である。

J.K.ローリング『ハリー・ポッター』シリーズにおける死生観  
—騎士道的価値観にみるハリーの「死」—

コース	国際文化コース
学籍番号	130206
氏名	川村 茉由
指導教員	加藤 千博

J.K.ローリングによる『ハリー・ポッター』シリーズは、1997年にロンドンで出版されるや否や世界中で大ヒットを記録したイギリスのファンタジー小説である。孤児の少年ハリー・ポッターが魔法界に暗い影を落とす闇の魔法使いヴォルデモートと戦っていくそのストーリーの中には、「死」という大きなテーマが提示されている。主人公ハリーは、全7巻からなる作品の中で仲間たちとともに冒険を続け、最終的に宿敵ヴォルデモートを打ち破ることとなる。その際にハリーとヴォルデモートの両者の明暗を分けたのが、それぞれの「死」や「生」に対する考え方、つまり死生観の違いだったのである。そのことをふまえ、本論文は、作中で描かれる死生観が、ヨーロッパに古くから伝わる騎士道的価値観から影響を受けているかどうかを検証するものである。というのも、作中で描かれる勇気、忠誠心、弱者の保護などといった要素、また剣や騎士団といったモチーフが読者に「騎士」の姿を連想させるものであり、「騎士」の行動規範とされる騎士道精神と本作との間のつながりは非常に深いのではないかという疑問を持ったことが、主題設定のきっかけである。主人公ハリーが強みとし、ヴォルデモートを打ち倒すのに大きな意味を持った要素の多くが騎士道精神に通ずるものであり、そして彼らの明暗を分けた要素の1つに死生観が含まれているとすれば、本作と騎士道精神の関係性を紐解くことによって騎士道精神の今日における価値、そして世界中で大ヒットを呼んだ『ハリー・ポッター』シリーズの新しい側面を発見することができるのではないだろうか。

騎士道的死生観と本作のつながりを検証するにあたり、本論文では騎士道精神を理解する1つの尺度として、トマス・マロリーの『アーサー王の死』を取り上げる。『アーサー王の死』に登場する「騎士」たちの死生観、それらが描かれた中世の人々にとっての「死」などについて考察しながら、『ハリー・ポッター』シリーズにおける死生観の騎士道的価値観との共通点を探究する。また、作品の中でよしとされた騎士道的死生観が、それらが描かれた中世とは大きく異なる現代社会の中でどのように生きるのかを探究する。

まず、『ハリー・ポッター』シリーズにおける「死」や「生」の描かれ方を、主人公ハリー、宿敵ヴォルデモート、作中に登場する童話集『吟遊詩人ビードルの物語』という3つの観点から考察した。その3つに共通するのは、「死」を受け入れないうちは「死」

を克服することはできないという教訓である。「死」に屈するのは弱者であり、不死であることが「死」の克服の成功であるとするヴォルデモートと、「死」に屈することは弱いことではないと考え、両手を広げて悠々と「死」を受け入れることで「死」の克服に成功したハリーの死生観は、対立している。『吟遊詩人ビードルの物語』の中にも、「死」を先延ばしにすることは「死」の逃避以外の何者でもなく、「死」はいつかやってくるものとして受け入れることで、「死」から解放された「生」を生きることが可能になるという教訓が込められていることを論じた。

次に、騎士道精神とその時代背景について考察した。騎士とは中世にヨーロッパで成立した、戦うことを生業とする階級であり、その行動規範が騎士道精神である。彼らの英雄譚が書物化されたものが騎士道物語であり、マロリーの『アーサー王の死』はその1つである。その中に描かれる「死」の特徴として描かれているのが、試練の達成としての「死」、「船出」としての「死」であるということを明らかにした。

試練の達成としての「死」は、『アーサー王の死』の中でアーサー王の「死」に見られる特徴である。自らの罪と試練を受け入れ、その結果の「死」から逃げようとしないうその姿勢は、『ハリー・ポッター』シリーズにおける主人公ハリーの「死」と共通する。どちらにおいても、「死」を拒否せずそれを受け入れる勇気を持つ主人公が描かれていることが読み取れるのである。また、「船出」としての「死」という観点においても、『アーサー王の死』と『ハリー・ポッター』シリーズ双方に「船出」、つまり「旅立ち」としての「死」が描かれていることを明らかにした。以上の点からは、騎士道的価値観に即して著されたマロリーの『アーサー王の死』とJ.K.ローリングの『ハリー・ポッター』シリーズのつながりは確かなものであることが分かる。中世を生きる「騎士」の理想とされた騎士道と現代のファンタジー小説との間に、価値観の類似が見られるのである。このことから、騎士道精神が中世だけにとどまらず今日にも通じる価値観を我々に提示するものであるとともに、『ハリー・ポッター』シリーズは単なる児童向け小説の枠を越え、誰もが逃げることのできない問題である「死」との正しい向き合い方を示すものであるということも明らかになった。

本論文では騎士道的死生観と『ハリー・ポッター』シリーズのつながりの深さを検証し、騎士道の理想とする「死」や「生」の見つめ方は現代にも通用するものであるということを示した。今日世界中で大ヒットを記録した『ハリー・ポッター』シリーズの中に中世ヨーロッパから伝わる騎士道精神が息づいていることから、現代における騎士道的死生観の価値の高さが明らかとなる。そして、『ハリー・ポッター』シリーズは単なる児童文学ではなく、読者に「死」について考えさせる場を与える役割を持つ文学であるということが明らかになったという点で、本論文は意義があると言えるだろう。

Kazuo Ishiguro's *Never Let Me Go*:  
Childhood Memories and Nostalgia

コース	国際文化コース
学籍番号	130354
氏名	鈴木 裕美
指導教員	加藤 千博

本論文では、日系イギリス人作家カズオ・イシグロが2005年に発表した長編小説 *Never Let Me Go* を取り上げる。物語は「ヘルシャム」と呼ばれる臓器提供のための人間のクローンを育成する学校で、親友と過ごした日々を回想しノスタルジーに浸るキャシー・Hが主人公である。語りが主人公の記憶に頼って進行するため、この作品には子供時代への郷愁、つまりノスタルジーが漂っている。また、人間のクローンを扱ったことから、本作品は空想的な世界を科学的仮想に基づいて描いたサイエンス・ディストピア小説に分類される。多くのディストピア小説は、行き過ぎた科学文明への警告を促すものであるが、本作品は「クローン」はあくまで設定であり、詳細な科学・医療技術について描写がなされておらず主題とは言えない。これは、本作品を通じてイシグロが真に伝えたいメッセージが他にあるのではないかという推測につながった。イシグロが本作品で幼少期の記憶を主題に据えた意図を明らかにすることが、本論文の主旨である。

第一章では、日本の長崎県で生まれ育ち、5歳の時にイギリスへ移住したイシグロの生い立ちに着目した。イシグロが自身のバックグラウンドについて語っているインタビューから、幼少期に過ごした日本とイギリスという2つの国が、彼のアイデンティティ形成に大きく関係していたことが明らかとなった。

第二章では、キャシー・Hたちクローンが幼少期を過ごす「ヘルシャム」が、理想の子ども時代のメタファーであるという観点から「ヘルシャム」について考察した。そして、全ての子どもたちは、牧歌的で幸福な、護られた環境で育てられるべきだというイシグロのメッセージが明らかとなった。また「ヘルシャム」は、外の世界の現実から遮断された気泡のような理想の幼少期として描かれていることが分かった。

第三章では、他のディストピア小説と *Never Let Me Go* を比較研究した。多くのディストピア小説は、被抑圧者たちが社会制度に疑問を抱き自由を得るため反乱を起こすが、本作品では自由を抑圧された者たちの社会への反抗が描かれていない。これはイシグロが、社会へ刃向かうことなく提供を当たり前のことと受け入れるようクローンたちが教育されているというディストピア社会を作り出したと言える。しかし臓器提供という使命があり短い命でも、幸せな幼少期を過ごすことで、その記憶を大抵

に人生を全うするクローンの姿から、幼少期の記憶の重要性について読み取ることができた。

第四章では、キャシー・Hの「信頼できない語り」に着目した。彼女の語りは、不確かな記憶を頼りに過去を回想したものであり、かつ一人称の語りのため信頼ができない。臓器提供や親友の死などを経験するキャシー・Hだが、彼女はいつも物事を前向きに捉える傾向がある。キャシー・Hのポジティブな姿勢は、信頼できない語りの性質により偽りである可能性は否めないものの、彼女が幼少期の幸せで無垢な記憶を懐かしみ大切に作る姿勢から、そのような幸福な子供時代を過ごすことの意義が明らかとなった。

第五章では、キャシー・Hが大切に所有していた3つのカセットテープに着目し考察を行った。1つ目のテープはキャシー・Hのお気に入り、彼女は繰り返し何度もテープを聞き大切に所持していた。2つ目のテープは、親友ルースがプレゼントしてくれた思い出の品である。3つ目のテープは、同じく親友のトミーと一緒に見つけた大切なものである。3つのカセットテープともオリジナルの歌をもとに大量生産された、価値の低いものであるかもしれないが、幼少期の幸せな記憶や、親友と過ごした日々の記憶が付加されることで、キャシーにとってはかけがえのないものとなっている。そこから、大量にコピーされたものにも、記憶が加わることで唯一オリジナルの大切なものになりうるという、記憶の価値が明らかとなった。

以上のことより、カズオ・イシグロは *Never Let Me Go* において、幸せで純粹無垢な子ども時代を「ヘールシャム」として描写し、そこで育ったキャシー・Hたちクローンが、幸福な幼少期の記憶を糧に臓器提供という使命を果たしていることが分かった。キャシー・Hたち人間のクローンは、「ヘールシャム」の外で待ち受ける残酷な臓器提供という事実についてよく知らないまま子供時代を過ごすことで、幸福な記憶を有することができた。もし彼女のようなクローンが自らの臓器提供や若くして死ぬという事実を早々に知っていたら、芸術に勤しむことはおろか、日々の生活に生きる意味を見出せなくなり、幸せな幼少期は過ごせなかつただろう。例え嘘で塗り固められていたとしても、子供たちが育つ環境は外の世界の現実を遮断した気泡のようであるべきだ。その護られた気泡の中で、幸福に満ちた牧歌的で無垢な幼少期を過ごすことで、その子供時代の記憶は成長しやがて大人になって直面する数々の人生の試練に立ち向かうための、ノスタルジーという安らぎを与える拠り所となる。*Never Let Me Go* は、人間のクローンを扱ったためディストピア作品に分類されるが、本論文は子供時代の無垢な記憶に焦点を当てて解釈もできるということを証明した点で意義がある。

ロアルド・ダール作品を読む  
— 『チョコレート工場の秘密』『マチルダは小さな大天才』における  
児童文学的価値の検証 —

コース	国際文化コース
学籍番号	130463
氏名	中川 南海
指導教員	加藤 千博

ロアルド・ダールは、児童文学作品によって 20 世紀後半に人気を博したイギリス人作家である。自身の体験記がアメリカの雑誌に掲載されたことをきっかけに執筆活動を行うようになったダールは、自身の子どもたちに向けて創作した物語を出版するようになったことをきっかけに、児童文学作品を中心に執筆活動を行っていく。数あるダールの児童文学作品の中でも特に人気を博し著名な作品となったのは、『チョコレート工場の秘密』、『マチルダは小さな大天才』の二作品である。ダールの作品は認知度が高く子どもに愛されているが、その一方でダールの児童文学作品に対する評価は賛否両論が顕著に分かれている。そこで、本論文ではダールの児童文学作品に児童文学としての価値があると検証することを主題とする。

そのために、三つの観点から検証を試みる。初めにダールの児童文学作品に価値があるかどうかを検証するために、良質な児童文学に備わっているべきものは何かを考察する。次に良質な児童文学に必要な要素の一つである「面白み」がダール作品に備わっているかどうかを、彼の作品に「面白み」を持たせている要素であると考えられるブラックユーモアの観点から考察する。最後に良質な児童文学に備わっているべきもう一つの要素である「教訓」がダール作品に見られるかどうかを、『チョコレート工場の秘密』と『マチルダは小さな大天才』の主人公像から探っていく。以上の三つの観点からダール作品を分析することにより、ダールの児童文学作品は果たして価値があると言えるかどうかを結論づける。

初めに本論文では児童文学を、大人が子どもの読者を想定して子どものために執筆した文学であると定義づけた。確かに児童文学とは子ども向けに書かれたものであるが、良質な児童文学と言うためには読み手である子どもだけでなく、与え手である大人にも求められる要素を備えている必要がある。子どもが児童文学に求める要素を「面白み」、大人が児童文学に求める要素を「教訓」と捉え、この二つが備わったものが児童文学として価値のある良質な作品であることが明らかになった。

では子どもが児童文学に求める要素である「面白み」の要素をダールの作品が備えているかどうかを、ダール作品に「面白み」を持たせる要素の一つであると考えられるブラックユーモアを取り上げて考察した。本論文では、ブラックユーモアとは攻撃性を

もった笑いであると定義づけた。このブラックユーモアは過去のイギリス文学にみられる諷刺の性質によりユーモアを持たせたものであり、シニカルな笑いが魅力である。ダールの児童文学作品において、ブラックユーモアは攻撃性を持った暴力描写として作中に表れている。その為に児童文学作品でありながら暴力描写をユーモアとして含ませることに對し批判の声も多くあるが、『チョコレート工場の秘密』『マチルダは小さな大天才』において処罰される者にはそれに値する理由があり、自身の行いに対する報いとして処罰を受けている。また、全ての暴力描写は現実では起こり得ないほど過度な暴力描写として描かれている。こうして現実離れした暴力描写にすることによって、作中の暴力描写は現実には起こり得ないファンタジーであると読者を安心させるとともに、純粹な「面白み」のみを与えることに成功していると言える。そしてこのようなブラックユーモアが作中に見られることから、ダールの作品に「面白み」が備わっていることが検証された。

最後に大人が児童文学に求める要素である「教訓」がダール作品に備わっているかどうかを、二作品の主人公像を考察することで検証した。二作品の主人公に共通する点であり、その一方で悪役との相違点でもあるものとして「欲の質量」が挙げられた。常に謙虚な姿勢を忘れず、周囲の人々を思いやる気持ちをもっている主人公像に對し、二作品で悪役とされるキャラクター像に見られるものは、周囲に悪影響を与える強欲さや傲慢さである。そして自身の深い欲望から生じた自己中心的な行動は、いずれ報いとして自身の身に返ってくるのだという因果応報の「教訓」が作中には含まれていることが明らかになった。

以上の考察から、ダールの児童文学作品は、良質な児童文学に備わっているべき「面白み」と「教訓」の二つの要素をどちらも作中から読み取ることができる。ダールの作品は確かに賛否両論の分かれる作品である。しかしダールの児童文学作品は、大人が児童文学に求める素質も子どもが児童文学に求める素質も含んだ、児童文学として良質な作品であると言える。ダールの児童文学作品は、読み手と与え手、すなわち子どもと大人の両者のニーズと合致しているからこそ、文学作品としてはもちろん映画や舞台作品としても世界中でその人気を誇ることに成功しているのである。以上を踏まえて、ダールの児童文学作品は児童文学として価値があると結論づけることができる。そして批判されることが多いダールの作品に価値があると結論づけたことによって、本論文はダールの児童文学作品における価値の向上に貢献したところに意義があると言える

## カズオ・イシグロ『日の名残り』における語り手の効果

コース	国際文化コース
学籍番号	130492
氏名	西村 友
指導教員	加藤 千博

カズオ・イシグロは長崎県生まれの日系イギリス人作家であり、1989年に発表した第三作目『日の名残り』で、イギリス文学で最も権威のあるブッカー賞を受賞している。『日の名残り』は人生の盛りを越えた執事スティーブンスが第二次世界大戦前の執事生活を回想するという設定だが、スティーブンスの一人称の語り手の曖昧さが多面的な読みを可能としている作品である。一般的に、読者は語り手の描写や解説を通して、小説世界の出来事や人物について知ることになるが、その際語り手がどの程度信頼できるかという問題が生じてくる。『日の名残り』のスティーブンスの語りは自己欺瞞や自己正当化に満ちていることから、その語りは「信頼できない語り手」と呼ぶことができる。本論文では、イシグロの『日の名残り』における「信頼できない語り手」スティーブンスが語ることの効果について検証した。

まず第1章では、イシグロと日本との関係性を見るために、彼の作家としての経歴と作風に触れた。5歳で渡英し、イギリス人作家として活躍するイシグロの作品に対して、多くの批評家から日本人的特性に関して議論されてきたが、日本とイギリスという二つの異なるアイデンティティを持つ点と作品に関係が見られるのかを考察した。その結果、彼の経歴と作風には関係性があり、生粋のイギリス人作家では持つことができない、彼だからこそ書ける作品につながっていることが明らかになった。

次に第2章では、『日の名残り』における「信頼できない語り手」の信頼性を検証した。『日の名残り』のスティーブンスをその他の登場人物との関係を見ることで語り手の持つ効果を推察した。スティーブンスの語りには嘘や自己正当化が見られると解釈でき、読者が彼に対し疑いの目を向けることとなることが明確となった。スティーブンスを語り手として設定することで、人間がいかにかに現実を歪めたり、隠したりする存在であるかを示すことができ、作品に大きな意義をもたらしていることが明らかとなった。また、映画化作品との比較を通し、「信頼できない語り手」という小説技法が小説だからこそ成立するもので、映像化することで小説作品の持つ効果が軽減しているという結論に至った。表現媒体が変化することで、同じ作品であっても視点が異なり、イシグロは「信頼できない語り手」という語り手の持つ効果を小説で最大限に利用していると考えた。

最後に第3章では、イシグロが『日の名残り』において伝えたかった主題について考察した。イギリスで実際に起こった歴史的事実と小説内の出来事との関係性を見ること

で、歴史的背景が作品に与える影響は大きいことが明確となった。また、スティーブンスの父であるスティーブンス・シニアは大英帝国の象徴として語られており、彼の描写を通してかつて栄えていた帝国時代のイギリスと衰退していく様子が示されている。イシグロは、スティーブンスに「古き良き時代のイギリス」を語らせることで、それが語り手自らの内面の投影であることを間接的に示し、彼の主人公像もイギリスも虚像として崩壊させていることが明らかとなった。「信頼できない語り手」であるスティーブンスを通して語ることで、イシグロはどんな人生も過ちは避けられないが、ただ過去に執着しても意味はなく、常に未来に目を向けて生きていくしかないということだと結論付ける。「信頼できない語り手」を用いることで、読者は自らの歴史認識が間違っていたり、普段目にしている世界に対して真実を知っているとは言えないことに気づくのである。

本論文では、『日の名残り』における「信頼できない語り手」スティーブンスが語る効果について検証した。「信頼できない語り手」スティーブンスに語らせることで、過去を恣意的に語ったり、自己を正当化するなどの人間の本性を示したという点に意義があることが明らかになった。語り手が「信頼できない」ということは、読者を惑わすとともに、読者一人ひとりの認識が誤っていることもあることを示し、見かけと現実とのズレを明らかにできるという点に意義があると言える。

ビートルズにとってのリヴァプールの価値  
—階級と都市、そして歌詞に表されるリヴァプールの性質を踏まえて—

コース	国際文化コース
学籍番号	130521
氏名	濱中 啓太郎
指導教員	加藤 千博

本論文は、「ビートルズにとってのリヴァプールの価値」という主題に沿い、ビートルズの変遷やイギリスの階級制度やリヴァプールという都市の特徴、そしてビートルズの歌詞中に表現されているビートルズとリヴァプールの心理的関係性を基に、ビートルズにとってのリヴァプールの価値について論じる。

彼らが過ごした幼少時代は、彼らの家庭が財産に恵まれていた訳ではなく、ごく平均的な生活を送っていた理由として、リヴァプールという都市が国際的な港を有する港湾都市として発展していたため、リヴァプール市民は国外から流入される音楽をイギリスで一番早く取り入れることができた。そのような環境で育ったビートルズは、結果として「世界で最も成功したアーティスト」として、ギネスブックに認定されているほど、世界的に著名なロックバンドグループになることとなった。そのような事実も存在することで、裏を返せばビートルズの成功にはリヴァプールが不可欠であると推測した。その推測を解決するため、本論文ではビートルズにとってのリヴァプールの価値とは何かを探究していく。

方法として、ビートルズが活動していた 1962 年から 1970 年の間を、「アイドル期」「アーティスト期」「解散を控えて」という三つの時期に区別し、それぞれの時期に彼らの歌詞中に示される“there”等の場所を表す単語をヒントにして、その当時のビートルズとリヴァプールの関係性を推察し、その時期ごとのリヴァプールの価値について論じる。そして、ビートルズを取り巻いていた「階級制度」、そして「リヴァプール」というワーキング・クラスの間を中心とした都市が持つハンディキャップについての提示も行うことで、より客観的にビートルズとリヴァプールの関係性を考える手法を使っていく。

結果として、月日を重ねるごとにビートルズにとってのリヴァプールの価値は重要なものとなっていった。アイドル時代では、ビートルズとリヴァプールの関係性を示している歌詞は皆無に等しいが、その傍らでビートルズとアメリカの関係やビートルズが考えるイギリスの価値を暗示した歌詞があった。彼らは当時若者のアイドルとして活動せざるを得ず、非常に多忙な生活を強いられていたが、リヴァプールを離れて年月が相対的に経っていないこともあり、リヴァプールの価値を示す歌詞が少ないのではないかと思われる。

次にアーティスト期のビートルズは、アイドル期と比較して顕著にリヴァプールを示している歌詞が多いことがわかった。しかしそれはリヴァプールが芸術として扱われた訳ではなかった。レコーディング技術の発達によって作品創作が容易になったこと、そしてライブツアーが無くなったことにより作曲が捗ったことも要因としてはあるかもしれないが、アイドルという多忙な時期を過ごした彼らであるからこそ、この時期は少し落ち着いたことがリヴァプールという故郷への想いを表現するようになったという結論に至った。

そして解散を控えた時期のビートルズは、リヴァプールのことを彼らの「元居た場所」として、彼らの「戻るべき場所」であるという歌詞を表した。それはつまり、世界を飛び回りその後創作活動にふけりバラバラになったビートルズが、彼らの目指したものではないことを意味し、愛すべき場所が沢山あり、かけがえのない友人が住むリヴァプールこそが、ビートルズにとって一番大切な場所であるという結論となった。

「ビートルズにとってのリヴァプールの価値」というのは、彼らを落ち着かせることができる、ビートルズにとって一番大切で大きな存在がリヴァプールであるということだ。仮定としてビートルズがリヴァプール出身ではなかったとすれば、ここまで注目を浴びる存在ではなかったかも知れないのではないか。そして、リヴァプールの特異性とも言える労働者階級の市民中心の都市であること、そしてその上で国際貿易港を有しアメリカのポピュラー音楽をイギリス国内でいち早く取り入れることができたという事実を基に、そのリヴァプールから新しい大衆文化が生まれ音楽シーンの一時代を築き上げることが可能であったことが考えられ、リヴァプールという存在はビートルズを構成する要素として必要不可欠であることを本稿で論じた。

また歌詞をビートルズ分析のテキストとして用い、曲調などという音楽的なメッセージではなく、文字を用いてリヴァプールの価値を探究することにより、ビートルズのメッセージを、音楽を単純に聴くという作業よりも、より深くテーマを掘り下げることが可能となった。

『時計じかけのオレンジ』における最終章の意義  
—原作と映画におけるエンディングの相違からの考察—

コース	国際文化コース
学籍番号	130651
氏名	森屋 敦正
指導教員	加藤 千博

『時計じかけのオレンジ』とはイギリスの小説家であるアントニイ・バージェスによって著されたディストピア小説であり、超暴力に明け暮れる若者と政府との対立が描かれている点から青少年にも関連した物語であるとも言える。ここから教育分野と関連させて考察することが出来るのではないかと考えたことが、本作品を取り上げた動機である。また1962年に出版された本作品は、その後スタンリー・キューブリック監督によって映画化された。この際にキューブリックは原作版のエンディング部分である第七章の場面を、自身の映画化作品の中から排除した。このような大きな相違点が原作と映画化作品の間には存在しており、その相違点を比較しながら原作のエンディングの持つ教育的意義について明らかにしていくことが本論文の目的である。

第一章ではディストピアについての定義づけを行い、その定義を用いて本作品に表れるディストピア性について論じた。第二章ではイギリス版とアメリカ版の二種類の原作が出版された経緯に触れた後、イギリス版の原作と映画化作品の相違点について考察を行った。また作品のタイトルでもある「時計じかけのオレンジ」という言葉そのものが表象するものについても論じた。第三章では映画化作品のエンディングと原作のエンディングのそれぞれについて、セリフや本文を引用しながら考察を行った。またその比較を踏まえ、原作の持つエンディングのメッセージ性について論じた。

第一章ではディストピアを何らかの現実世界に対する諷刺や批判が込められた望ましくない架空の世界で、読者に望ましい世界とは何かを考えさせるようなものであると定義した。その上で本作品においては、残虐性の高い暴力のはびこる世界と理不尽な暴力を振るう警察が採用されてしまう組織制度、また少年を人として扱わない国家による不完全な管理制度である感化矯正の制度にディストピア性が表れていることを明らかにした。さらに強制的に善を選ばせるように条件づけるルドヴィコ療法という犯罪者矯正の制度に顕著にディストピア性が表れていることを明らかにした。第二章ではアメリカ版の原作のエンディングが出版社の意向によって削られたことに対するバージェスの不満に触れ、彼自身も最終章を重要視していたことを読み取った。さらにバージェスが伝えたかったメッセージの一つに、自由意志や道徳的選択権の重要性があることを明らかにした。また作品のタイトルにもなっている「時計じかけのオレンジ」という言葉には犯罪矯正を受けたアレックスや、世代を超えて引き継がれ続ける負の連鎖などが表象されているこ

とを明らかにした。第三章では映画版のエンディングからは政府に利用され続けるという点でディストピア性を読み取ることができるが、元の暴力的な性格を取り戻す場面で結末を迎えるという点で、アレックスの復活という恐怖の方が鑑賞者の印象に残ると解釈した。一方で原作のエンディングではアレックスのこれまでの悪行が若さゆえであったと結論づけられており、説得力に欠けるという指摘についても言及した。また物語の結末でアレックスは結婚して子供を設けることを想像し、自分の子供も自分と同じような悪行を繰り返すであろうと考える。ここからアレックスの子供は負の連鎖を象徴しているものであり、アレックスのような人間が普通に暮らしていくことの出来る世界のディストピア性を明らかにした。

本論文を通して映画化作品と原作のエンディングを比べることで、映画と原作それぞれにおいてディストピア性の強調のされ方が異なっていることを明確にした。またそのようなディストピア性が顕著に表れているのがルドヴィコ療法であり、望ましくない教育の表れの象徴であることを明らかにした。その上で原作のエンディングはルドヴィコ療法などの間違った教育では負の連鎖を断ち切ることができないことを示していると解釈し、そこからディストピア作品である本作品からであっても、正しい教育の重要性という教育的側面を読み取ることが出来るという意義を見出した。